

Title	大洲市立図書館蔵 「一もと菊の物かたり」
Sub Title	Hitomotogiku no monogatari
Author	松本, 隆信(Matsumoto, Ryushin)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1970
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.28, (1970. 2) ,p.17- 47
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	資料翻刻
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00280001-0017

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

資料翻刻

大洲市立図書館蔵「一もと菊の物かたり」

松 本 隆 信

解 題

室町時代に簇出した群小の物語作品は、内容がきわめて多様で、その成立の契機を探ることもかなり困難な問題であるが、その中で、比較的明らかにされているものに、王朝物語の系譜を継ぐ、鎌倉期擬古物語の改作と目される幾つかの作品がある。市古貞次氏が公家小説として分類された「しぐれ」「若草物語」「扇流し」「伏屋の物語」「岩屋の草子」等で、これらの作品の基をなした鎌倉期擬古物語そのものは、いずれも現存していないが、風葉和歌集に採られた「恋に身かふる」「世をうぢ川」「あふぎながし」「ふせや」「いはや」等の和歌と、その詞書によって知られる筋の一部とが、上記の室町期物語と合致する所から、これらは風葉集に書名の見える散佚物語の改作であろうと考えられている。

ここに新出の一伝本を翻刻した「一本菊の物語」もまた、それらと同類の作品である。風葉集に「あたなみ」と呼ばれる作品の歌二首が左の如く採られている。

(卷五秋下)

みこにおはしましける時、きくのえんせさせ給に、前中宮いまたさとおはしましける御まへのきく関白にめされけれ

は、ひとと奉れりけるのちに、さしおかせ給へりける 　　あたなみの院の御歌

わか心君かまきにうつるふは猶やのこれるしら菊の花

(巻八 羈旅)

兵衛佐に侍けるとき、さつまのくにうつされけるに、いよのみなとふいふ所にて、みやこ鳥をみてよみ侍ける

あたなみの中関白

都鳥恋しきかたの名にはあれとわかふる郷のことつてもなし

この二首と殆ど同一の和歌が、現存「一本菊の物語」の中に見出され、右の風葉集の詞書に記されているこの二首のよまれた経緯も、「一本菊」の筋と全く一致する。更に「あたなみ」という物語名についても、現存「一本菊」の中で、兵衛佐の想い人侍従の内侍が、兵衛佐の流罪地薩摩へ下って再会を遂げる条に、

身をすてゝみるめとりにそあたなみのうらまでふねをさしてきにけり

あたなみのうらにいかなるちきりして身をすてゝしもみるめかりけん

という二首の歌が載せられており、この歌の詞句が「あたなみ」の題名の由る所ではなかったかと解釈し得るのである。このように、風葉集によって知ることのできる範囲では、現存「一本菊」は古物語「あたなみ」と全く一致している。「一本菊」はその文体から見ても、到底鎌倉期の物語とは考えられないので、この「あたなみ」を室町期に書き改めたものであろうが、その構想は、粉本とした「あたなみ」とかなり近いのではないかと思われる。

「一本菊」の内容は、同類の「伏屋の物語」や「岩屋の草子」などと同じく継子物であるが、継子と本子とが、それぞれ男女二人ずつ登場するのが他の作品と異なり、それに伴って二組の恋物語が語られるなど、筋もやや複雑になっている。また、「伏屋」や「岩屋」と違って、筋の運びの上に、神仏の靈験や超自然の力を借りてこないのも特徴である。(ここに翻刻した大洲図書館本には、後述するように長谷観音の利生譚が附加されているが)これらの点から見ても、この作品は、上記の鎌倉期物語の改作作品の中にあつて、

少なくとも構想に關しては、原作の佛を比較的濃く残しているものと想像してよいであらう。

「一本菊」の伝本は、現存する本が相当に多い。筆者の調査し得たものだけでも、写本には、

慶応義塾図書館蔵〔室町末江戸初間〕写本 一冊

天理図書館蔵〔室町末江戸初間〕写本 一冊

をはじめ、江戸期の写本が十本ほど存し、刊本では

万治三年西田勝兵衛尉刊本・寛文十一年松会刊本

の二種の版が伝存している。刊本には更に古く、現在は所在不明であるが、川瀬一馬氏が「古活字版之研究」に載せられた

〔寛永〕刊古活字本（存上巻）

もある。

これらの諸本の本文は、筋の運びや、叙述の大筋にはさして大きな違いは無いが、詞章における語句の出入異同は一本毎に見られ、相互の關係は非常に複雑である。本文の比較校合の上から諸本を縦に系統づけることは殆ど不可能なほどで、室町期物語における伝本の一つの典型を示している。このような作品の場合、成立の古い本ほど、特に価値を有すると言ふことができるが、その意味では、右の慶応本・天理本と並んで、慶長期前後の書写にかかるこの大洲図書館本は、「一本菊」研究に重要な古本である。

この本は、国学者矢野玄道の旧蔵書で、現在、愛媛県大洲市立図書館の矢野玄道文庫に架蔵されている。長沢規矩也氏の御教示により、昨春同館に赴いて調査をすることを得た。この大洲図書館本の書形は左の如くである。

〔室町末江戸初間〕写本、一冊。袋綴。鳥の子紙打疊表紙、縦二五糎、横一九・七糎。外題、表紙左肩に「一もととき物語」と墨書。

内題、表紙見返しの左側に「一もと菊の物かたり」と墨書、本文と同筆。本文字面高さ約二二糎。本文五十丁、每半葉十一行、各行二十字内外。奥書、巻末に「本のまゝうつし申なり」と記し、次に和歌一首を添える。本文は和歌の所のみ改行する。濁点、句点は無。全巻に亘って虫食が多く、字を読み得ない箇所が随所にある。

本書の本文もまた、他の写本のいずれとも異同が多く、個性を有する本であるが、注目されるのは、刊本系の本文に近いことである。本書と刊本系の本文の間には、やはり語句の出入異同が決して少なくはないが、他の写本と比較すると、刊本系特有の増補の詞章などにおいて一致する部分を多く含んでいる。刊本系の最古版は、前述のように寛永頃の古活字版であるが、本書の書写年代はそれよりも先立つと推定されるので、管見に入った諸本の範囲内では、本書は刊本系の本文の成立に最も強い影響を与えた本であると言いうことができる。なお、他の本に見られない、本書独自の特徴としては、兵部卿の宮が失踪した三条の姫君の行方を求めて長谷の観音に参籠すると、都四条の辺を尋ねよとの示現を蒙る記事がある。「しぐれ」「若草」「伏屋」などの他の同類の作品にあっては、このような神仏の利生を強調する趣向がしばしば設けられている。本書はそれらに倣って、利生譚としての色彩の薄い本作に、新にこの記事を増補したものであろう。従って本書は、慶応本や天理本などより古い形態の本文を有するとはなし難い。しかし、江戸期において最も流布した筈の刊本系本文の原型を示す本として、本書のもつ価値は少なくないと考えられる。

終りに、本書の調査や複写について格別の御高配を賜わり、また翻刻をも快く御許可下さった大洲市立図書館に対し、深く感謝の辞を申上げる。

凡 例

- 一、底本は愛媛県大洲市立図書館蔵写本一冊である。
- 二、翻刻に当って、底本の文字は通行の字体に改めた。
- 三、私に改行をし、句点を施した。底本の改丁の個所には「」を附し、丁数を記した。
- 四、虫食のために読み得ない文字は、相当の字数を□で埋め、推定できる場合は、その文字を「」に括って本文中に入れた。
- 五、意味の通りにくい個所、欠字の個所で、本文の最も近い刊本が参考になると思われる場合は、その個所に一連番号を附し、巻末に「万治三年西田版の本文を注記として掲げた。」

一もと菊の物かたり

むかし、てんりやくの御かとの御時、三てうたかくらに、さ大しんときゑゑし人おわします、ゐんちうのおほえ、かしこくをわしき、又、きたの御かたも、たゝ人にてはおわします、ふるき御かとの御むすめ、しきふの宮とそ申ける、さ大しん、しのひてかよひ給ひけるか、しかるへき御ことにや、この御はらに、わか君一人、ひめ君一人をはします、わか君、七さあより、てんしやうせさせ給ふ、やかてかふりをたまはり、ひやうゑのすけとそ申ける、ひめ君、みめかたち、心はせ、人にすくれてそまし／＼ける、ちゝはゝ、いかにもかなと、いつき給ひて、きさきに「(1オ)たてんと、おほしめしける

さるほとに、しやうしむしやうの世のならひにて、はゝ御せん、おもきやもうのゆかにふし給ふ、しんめい、ふつたにいのれとも、さらにそのしるしもなく、日々に大事になり給ふ、いまをかきりとみゑしかは、さ大しんとのをしやうしまいらせ、しやうしのならひ、かきりあり、されは、きへんいのちはをしからず、た

ゝおもひおく事とは、このおさあひものゝ事はかりなり、いかなる御ありさまにておはずとも、見はなち給ふな、ことにひめ君、なみ／＼ならん事にあわせたま□な、これはかりそ心にかゝるとの給へは、さ「(1ウ)大し□、ひめか事、御身ひとりの子にてもあらず、御心やすくおほしめせ、たゝわかれなん事こそかなしけれど、の給ふ、さてはうれしきことかなとて、にしにむかゑ、なむあみたふと、十へんはかりとなへさせ給ひて、ねむるかことくおはり給ふ、さ大しん殿、きんたちをはしめたてまつりて、いかにせんとそ、なけき給へとも、そのかひそなき、さてあるへきにあらされは、なく／＼、れんたいのにおくりけり

さてしもあるへき世のならひならねは、人にすゝめまいらせければ、時の御かとの御めのと、はりまの三みと申ける人をかたら「(2オ)ひ給ひける、この御はらにも、ひめ君一人をはします、又、ほとなくわか君一人いてきさせ給ひけり、□おさあひ時より、てん上へまいらせ給ひて、七さあより、かむりをたまわり、しゑのせうしやうとそ申ける、又、ひめ君も、をさあひより、てん上に、つほねたまわり、そつのつほねとそ、はやりけるさきの宮はらのひめ君は、たうほくにおされて、世のきけいおわせず、されとも、ちゝ大しんのおわすれば、さてははてしと、

たのもしくそおほへし、せん／＼のくわほうや、うすかりけん、
ち□□ん殿、御心、れるならず、なやみたまひ⁽²⁾け□□、
つゝめにはかなくなり給ひぬ

さるほとに、ひやうへのすけ殿、ちやく／＼にておはするほと
に、御あとをもち給ふ⁽¹⁾つきに、たうほくしいのせうしやうにとら
れ、さきの宮はらのきんたちは、かすにもあらずなり給ふ、され
とも、なましいに、てん上し給へり、つほね⁽²⁾へ、ひやうへのす
け、しゆつけをもち、やまはやしにとちこもり、ちゝはゝの御
ほたいをも、とわはやとはおもへとも、たゝひめ君の御事のみ、
心くるしく、いまはちゝはゝましまさねは、われよりほかは、又
たれをかたのむかたもおわせす、又、心やすくあつけをく人もな
し、なましいに³おみやつかいして、あけぬくれぬとすきぬ
あるとしの、なか月十日あまりに、ひやうふきやうの宮の、御か
たに、菊あわせのありけるに、人々申けるは、ひやうへのすけの
ものとさにとこそ、まことにいつくしき一もときくははんへるな
れ、かれをめして、御らんし候へかして、申されければ、さらは
とて、このきくをめしければ、をしみまいらすへき人にもあらね
は、かのきくをまいらせければ、まことに、色にほひ、ゑたさし
のやう、ことなる菊なり、宮、御うれしくおほしめし、御まへの⁽³⁾

しとみの□わに、ませゆわせて、うつし給ひて、ひやうへ⁽³⁾
のす「け」のかたを御らんしあわせ給ひて、ありかたきたからを
まうけたる心地し給ひて、かのきくをは、いつくにてたつねいた
したるそと、せんしなりければ、こ大しん、くらまゑまいりて候
し時、しくわもん⁽⁴⁾のきくとて、ぬしのせんさいにうゑて候しを、
大しん、さりかたくこいとりて、いへにつたへてをき候しを、ち
ゝはかなくなり候てのち、いもうとにて候物に、ちゝのかたみに
せんと、をしみ候しを、めしにしたかいまいらせ候と、申給へ
は、いもうとは、そつ⁽⁵⁾の三み、そつ⁽⁵⁾のつほねかと、とひ給へ
は、さわはんへらす、われとおなしく⁽⁴⁾さきの宮はらなり
と、申給ひければ、宮おほしめしけるは、いてや、はりまの三み
のもてなしにて、おほえこそなければとも、いん中にも、このひや
うへのすけに、ならふうんかくはなし、まして、によしにて、か
れらかいもうとならば、いかにいつくしかるらむ、あわれ一め見
はやと、ふかく御心をうつし給ひけり

このひやうふきやうの宮は、たうていの御はら、まことの御せう
と、よろつつねは御めをかけ、このひめ君の事を、夜もすからお
もひ給ひける、あけもはなれねは、宮、とし十四□はかりにて、
よろつものになれたるわらは⁽⁴⁾をめして、あのきくおりてま

てらせよとのせんしなりければ、朝ほらけ、露のしけきに、きぬのすそをとりて、きくをおりてまいりたり、おなし色なる、きくかさねのうすやうに、かくそあそはしける

我かこゝろ、君かまかきに、うつろふは、なをやのこれる、し
らきくの花

きくのしら露、おきそむるよりくるしき物をと、あそはして、きくのゑたにむすひて、これをひやうへのすけのさとの、いもうとのすむらんかたの、なかのかうしにさしてかへれと、おほせられければ、ときわ、もとより、このうちのしさい、よく「(5ま)しりたるものにて、三てうたかくらゑゆきて、このひめ君のおはします、にしのたひのなかのかうしに、さして返りぬ

女はうとも、御かうしまいら「せ」んとて、たちいてけるか、このはなをとりて、これにさふらいしはなに、なへてならず、にほひかほりたるうすやうに、うたのかゝれる、御らん候へとて、ひやうへのすけにみせまいらせければ、これを取て見給へは、ひやうふの宮の御てにてわたらせ給ふなり、こはいかにおほしめしよらせ給ひけるぞ、もとより、これこそあらまほしくありつれ、ちゝはゝ、いきておほせは、いまゝてはあるへからず、いまは「(5ウ)女こ、きさぎのくらあにも、いらせ給ふへきに、このたひ

文あらは、御返事すゝめよ、女はうたちとそ、の給ひける
ひるほとに、宮ときわをめして、又文あそはし、かくなん

ふみかよふ、あとはしらねと、あふさかの、せきの人こそ、し
らまほしけれ

このたひは、あらわれて、御返事こゑとのせんしなり、ときわたまはつて、三てうへゆき、にしのたひにて、ひやうぶきやうの宮の文よと、御返事給候へといゑは、女はうたち、こはいかに、おもひもよらすとて、とり給ひ候はねは、むなしくかへりぬ、又おし返し、かくなん「(6オ)

くれなひの、すへつむ花や我ならん、ふみかへさるゝ、身こそ
つらけれ

いまはこそ、むめのころも色もかわらんと、あそはして、たゝし
いて返事をこゑと、せんしありて、つかわ□□、ときわゆきて、
やう／＼にいへとも、よくもあしくも、人たにもいてす、とき
わ、おさな心に、ねたく、くちをししくおもひて、こわいかに、た
うし、わか君の御ふみを、めたましくもてなし給ふ、ひんなさ
よ、とりたにあげ給ひ候はすとて、みすよりなけれける
さるほとに、御返事はなかりけり、そのゝち、うすやう色うつく
しきに、御こゝろをくたき、ことのはをつくし、かきて、おし返

しく、ゆく水にかす」(6ウ)かく心ちして、御返事なし、宮、ねたくいひそめて、よしなし、さてこそあらめ、とかくいわんほとに、はゞ女この御かたへきこ多ん事もはつかしく、とゞまらんとおほしめし、文もたえぬ、をもわしとおほせとも、わすれかた、たゞ一すちの御思ひなり

かくて、日数をふるほとに、宮はうちしつまりて、よろつものあわれなるおりふし、ときわ、おさな□□□、宮の御おもひにしつみておはしますを、あわれにおもひまいらせて、ほとちかくまいりて、申けるは、この御事やませ給ふへきか、つねはゆきて見はんへは、しかるへくもなし、中く〜とかく」(7オ)御ふみ候へは、色めきつゝみて、人とも御返事をも申されず、たゞをしていらせ給へかし、しかも、こん夜は、ひやうへのすけ、うちの御とのゐにて、てん上に□□□いり給ふ、たかくるまともなく、かひまきれて、御くるまをは、中もんにたてさせ給ひて、女はうたち、御とのいあふら、御かうしなといわんまきれに、にしのつまとよし、まきれいらせ給ひて、かうしのきわにたゞすみ給ひて、もしひろくなりて、よくく御らんし、御心につかせ給候は、まきれいらせ給ひ候へと申せば、宮、しかるへしとおほしめして、くれゆけは、御めのとの、さぬきの女はう」(7ウ)のくるまをめし

よせて、てん上人のまねにて、いてさせ給ふ

神な月一日の事なれば、おりしも、しくれうちして、風あらかに身にしみて、物あわれなる夕くれ、しくれのあめはれければ、夕月のいとさやかに見えけるに

おほつかな、たそかれときの、夕月夜、うわの空にも、出にけるかな

我が御心ひくまゝに、おさあひもの申につき給ひ、□ろく〜しくはおほしめしなから、三てうにをわしましつきて、けにも、たか車ともなく、あまた出入けるにかひまきれ、いり給ぬ

御くるまをは、ちうもんにたて、それよりいらせ給ぬ、女房」(8オ)たちとも、御かうしをおろし、そゝめきけるまきれに、つま戸よりいらせ給ひて、かうしのそはに、しのひたゞせ給候へは、ときわ御車のうちにふ「し」にけり、とほし火しろくかきたてゝ、とうたいとも、あまたあきらかなり、宮、かうしのもと「に」たちかくれさせ給ひて、くわしく御らんしければ、まことに物しつかに、きちやう、ひやうふたてならへて、御まゑに女はうたゝ三人いたりける、一人は、とし廿四五にみへたり、くちはのひとへに、くれなひのはかまきたり、これは、ひめ君の御めのこと申なり、一人は、あひのーかさねに、しろきはかま」(8ウ)をきた

りけり、これは、ゑもんのすけと申女房なり、いま一人は、きくかさねのあこめに、からあやのものをきたり、これは、みやと申はした物なり、おくを御らんしければ、ちいさききちやうさしよせて、ちやうたいのひき物あけて、としのほと、十四五はかりにてそおはすらんとおほしきひめ君、菊かさねの五ゑに、こうはいのほひ□こうちきに、くれないのはかまふみなかし、ことうちひきておわしける、かたち、ありさま、かみのうへよりはしめて、御くし、はかまと一しほなり、ひすひをなかしたる心ちして」(9オ)まゆ、ひたい、けしき、たとへかたく、けたかく、あたりもひかるほとなり

宮はこれを御らんして、あないつくし、いてや、うち大里にて、女うこ「き」さきなど、又宮はらをはしめ、おほくの人をこそみつらんに、いまた、かゝる人をみす、この程、よろつの人をすきましくおもひしか、かゝるしんにあわんとての心なりと、うれしくおほしめし、いつまでかまつへき、いまはみたれいらんと、おほしめすに、かみな月のころなれば、あらしはけしくふきつゝ、つまとをりやうへふき「わ」け、御まへのとほし火きへにけり、こわいかに」(9ウ)あへなくきえぬる、いまはひんかしのたいゑ、火なとと申さ、れあのむつかしき事にてありなん、さらは、こん

やは、きよしんらせ給ひ候へかして、ゑもんのすけは、ひやうふのきわにふしぬ、御めのとこ、「き」ちやうおろし、ひめ君の御あとにふしにける

宮は、とほしひのきゑぬるを、うれしき事におほしめし、かねてより御らむしたる「こ」となれば、やかて、ひめ君の御かたわらに、ふさせたまへは、かふりのかけのしけるに、ひめ君おとろきさわき給ふ、御めのとこ、いそぎ、これはゑもんのすけにておはすか、いかに、たれにておわするそと、しぎりに」(10オ)あやしめ申ければ、宮うちわらわせ給ひて、なにといたくあやしめて、とわせ給ふそ、あまりに、心つよくもてなし給ふうらめしきに、かくまでたはかりまいたり、いまはかうとて、おはしましければ、たとへは、たれにてもおはすとも、いまたならわせ給ひ候はて、あまりにさわき給へは、こんやはかりは、ゆるしまいらせて、とく／＼返り給へと、申せは、つれなげなるけしきにて、いさしらす、このほとどの心まよひ、みちもわすれておほえねは、いかてかかへり候へきとて、よりふしてまませは、ちからおよはす、さてさふらはんも、ひんなければ、めのとこも、きちやううちあけて出」(10ウ)ぬ、さてこよひは、いつれの人の、御つまとをはかけさりけるそ、ゆいかひなやと、ゑもんのすけとわひけれ

は、宮はおかしとおほしめして

さてひめ君、おもひよらぬ事なれば、いかにせんと、しのひかねて、なきしつみ給ふ、宮は、おほしめしめし日より、御心つくしの事、かきくときかたり給へとも、物ほものたまはず、一ことの御返事もなし、わか(9)なんろうにたくこをひまさる心ちして、いまかたときも、たちはなるへき心地も、おわします、千代をもよも、かさねたくおほしめせとも、その夜もやう／＼あけゆけは、とりのこゑこそきこゑけれ、とけた(10)き夜わのけしきにおきわかれ「11」御なをしひきつくりい、あか月おきの袖のうへ、露けきならひなりければ、くれな(11)ゑとわんと、ちぎれとも、さらにゆるきもしたまはず、あかぬおもかけ、御身にそいて、なく／＼御かへりありて、くるゝをおそしと、おほしめしける

神な月のころなれば、くらしかたくまち給て、又、ときははかり御ともにて、いらせ給ふ、いまわ、一夜もへたてであるへしとも、おほしめさす、あめのふる夜も、ふらぬよも、夜ことにかよはせ給ひける、しのぶ我が身のひくまゝに、むかしの人のちぎりさへ、いまおほしめしけれとも、御身のうへなれば、人めをつゝ

「ま」す、かよひ給ひける
まゝはゝのさんみ「12」きゝつけて、よい、あか月、人をたて

／＼見せければ、まことにいてり給ひける、はりまのさんみ、あさましく、ねたくおもひて、むすめのそつをよひて、いかゝすへき、このにしのためのひめ君のかたへ、ひやうふきやうの宮の、夜ことにかよはせ給候ける、いまゝてしらすりけるあさましさよといふ

むすめのそつ、いかなりけるたよりそや、我君、いまたまうけの君もまします、いかなる事もあるならば、このひめ君、いつくしくおはしませは、おほしめしつかせ給ひなん、さためて、きさきにもたち給ひなん、かすならずしなして、我かつかわしめにせんと、おもひつるに「12」いかゝせん、さらぬさきに、このひめ君をうしなふへしなんとゝ、いゝければ、さんみ申けるは、ひめ君をうしなはんするは、やすきほどの事なれとも、あにの、ひやうふ(13)きやうのすけあらむほとは、いかにおもふとも、かなふまし、まつ、ひやうへのすけをうしないてのち、ひめ君をうしなはん事、やすきなりとて、うしなはん事をのみ、心にかけておもひけるに、五せつのころにもなりにけり

このしゐのせうしやう、右大臣の御こ、ひやうへのすけのしなん、されとも、この人にわにす、見めかちよりはしめて、何事につけても、おとりければ、ひか事のみしける、われ「12」じよ

り、くわんたかき人をも、御かとの御めのときしよくして、我心のまゝに、おこなひけり、されは、くきやう、てん上人にくみて、こゝろをひとつにして、五せつの夜、やみうちにせんとありければ、されとも、ひやうへのすけは、ちゝの事をおもへは、おとゝのなもおしくて、この事にはいろわす

すてに、五せつの夜にもなりければ、くきやう、てん上人、おの／＼まいりたまひけり、しいのせうしやうも、くちにたちければ、又れいのごとくに、我かまゝに、ひころしたる事なれば、はや、てん上に、やみうちはしまりて、しゐのせうしやう、かふりうちをとし、なをしさん／＼にひ¹³おきちらし、いきかひもなくなし、しゐのせうしやうは、はゝはりまの三ゐのつほねにゆき、われやみうちにせられ、かふり、なをし、みなみたれ、いきかひなしといふ

はりまの三み、よきついでとおもひ、おやこ三人つれて、御かとの御まへゑまいり、なく／＼申けるは、しゐのせうしやうこそ、やみうちにせられ、いきかひもなくなされ候へ、これは、くきやう、てん上人に、何のいしゆにかくはつかまつり候へき、たゝひやうへのすけ、さ大しんの御あとを、われこそとおもひしに、しゐのせうしやう、かやうに候へは、そのいこんに、こんや、くき

やう、てん上人をかたらひて、やみうちにして候、ひや¹³うへのすけを、いかならんめにも、あておこなわせ給ひ候はずは、わらはおや子三人、てん上にて、かみきりすてゝ、さまをかへ、いかなるみ山にも、ひきこもり候はんと、なきこかれ申ければ、御かと、御めのとたるにより、おとろかせ給ひて、天上¹⁰にほんのまゝあるへしとて、しやおこなわせ給ひて、御かとせんしなりければ、ひやうへのすけ、一かたならず、つみふかし、まつ、とか¹⁰〔も〕なきせうしやう、うしなわんとす、又、さしもの御せつをやふり、てん上にて、やみうちする事、とりかさねてふしきなり、それ、いかならんつみにも、おこなふへしと、せんしなりけり、くわんはく¹⁴との、いかなるつみにおこなふへしと、申されければ、御かと、かふりをうはい、くわんをとゝめ、とく／＼みやう日、たつおのときに、さつまかた、いわふかしまへなすすへしと、せんしくたさせ給ひける、ときのくわんはくをはしめまいらせ、かたへのくきやう、てん上人にいたるまで、御めをあわせて、これはいかにやと、やみうちのゆへなれば、むねとしたるなれば、我々こそ、いわうかしまへもなかさるへきに、ひやうへのすけは、いろわす、さしのきてこそありつれ、とかなき物を、いかてかなかさせ給ふへき、これ申させ給へと、おの／＼な

けかせ給へとも、いんせんあせのことくし、いてゝかへらさ
(14ウ)りければ、ちからおよはずなりけり

くわんはく殿、しはらくありて、ひやうへのすけとの、いかなる
つみのむくいにて、なかされたまひ候へき、りんしすてにくたり
ぬ、あすのたつとき、みやこをいて、さつまかた、きかぬかし
まと、さたまりぬ、かゝるにこりさせ給候はぬ我身こそと、うち
うらみて、ちたまいぬ、かたへのきやう、てん上人、われも
くくと、こゝかしこにたゝすみて、あなあわれや、いかにとかな
しみて、しんやうのきのほとりに、月日をおくりけんためしも、
(15オ)いまこそおもひしられたれ、ひやうへのすけ殿は、とかなき、き
かぬかしまへなかされん事のかなしさよ(15オ)はりまのさんみの
もてなしにてと、おほえこそなけれとも、しぬかくわけんのうち
にも、この人をこそ、まつはしめともたのみつれ、はなのもと、
月のまへ、いかはかりさひしからんと、おのく袖をそしほられ
ける

なかにも、なかつかさの宮御子、さんみの中しやうと申人、こと
になこりをおしみて、しんてんのかくのまのなけしに、うちいて
(16ア)たるへし、なをしのそてをひきちかへ、なくよりほかの事そな
き、さんみの中しやう、の給ひけるは、ひやうへのすけ殿七さ

い、われも七さいのとし、おなしくてん上して、そのゝち、たか
ひにあさからず、思ひかよはしてはん(16ウ)へるに、花のもと、
秋は月のまへ、一夜も、ひとりなむる事なくて、てん上にまい
り、たかひに、ひやうへのすけ、けふはまいりたまはぬときは、
さひしくおほえてかへり、おわする時は、くるまをとほせ、なん
てんのさくら、ませのしらすくのあそひにも、いつかわはなれま
いらせしかとも、あらぬわかれかな、たゝ夢にやとて、なき給ふ
ひやうへのすけ殿、の給ひけるわ、ちゝにもはゝにも、わかれま
いらせしかは、やかてしゆつけして、さんやにましわり、ちゝは
ゝの御ほたゐをも、とふらい申さんと、ふかくおもひしかとも、
たゝいもうとの、ちゝはゝもなし、我よりほかに、たのむかたは
んへらす候を、うちすてゝたれにあつくへきと(16エ)それをきつ
なに、おもひきらぬゆへ、かゝるうきめを見つるかなしさよ、か
くてこん夜はかりは、御物かたり申たく候へとも、三てうへ返
り、いもうとに、心しつかに、さいこのいとまこい候はんとて、
たち給へは、申しやう、たもとをひかゑ、かくなん
おもひきや、かけならへつる、つゆのよの、雲井の月に、わか
るへきとは
又、ひやうへのすけ殿、かくなん

しらざりつ、けにもろともに、見し月の、雲井のかけに、たえん物とは

かやうにうちなかめて、しくてんををりつゝ、なく／＼おわしまず、ころはしも月十五日夜の事なれば、しもしろくふりつもあり、雪けのくもはれければ、月はくま(16)なくてりにけり、かせはけしく身にしみて、これをさいことおもへは、こゝかしこめにとまり、さすか七さいよりまいりて、くものうゑのすまひ、もゝしきや、大宮人にましわりて、かふり、なをし、ひさをくみなれしなこりも、身をさらす、又いつかわと、おもひなすに、心もきへ、めもくれて、なく／＼いてさせ給ひけり

さても、きやうこくの大なこん殿、ひとりひめ君、しゝうのないしとて、かみかたち、いつくしくありければ、御かたとをはしめまいらせて、くきやう、てん上人にいたるまで、心をつくしつゝ、色々さま／＼に申させ給へとも、なひく気づしきもなかりしか、しかるへきちきりにや、この人にあひそめしひより(17)あざからすおもひて、しのひ／＼に、かよひけるに、ひやうへのすけ、いまをかきりとおもへは、しゝうのなひしに、いとまこわんとて、ちんのをきみちよりたち返り、なひしのつほねへおわします、つまとをほと／＼とたゞき、しきふのつほねやおわす

る、ないしはこれにはましますか、さいこにけんさん申さんとて、まいりたりと、いわれければ、ないし、うちよりおりて、ふしけれとも、色々しき御心にて、見にいてざりければ、ひやうへのすけ、たちかねて、ざりとも、てんしやうにて、きゝたまひつらん物を、しんせきたへたるうみのうへにたゞよひて、又みやこゑ返るましければ、さいこのいとまこい(17)申さんとてこそまいらたれ、よし／＼、さらはかへらんといふこゑをきゝて、こわいかにとおもひて、たゞいまうへよりいてゝ、もからきぬきけるか、いそぎあけて、たゞくれなひのかさねに、はしのもみちのこうちぎ、しとろにひきかけたれは、ひたいのかみの、月にあて(18)と見えければ、これやかきりならむとおもふに、心きへまとひなから、ひさのうへにかきのせ、ひすゑのかみをかきなてゝ、あなうらめし、ざりとも、てん上去てきゝ給ひつらん物を、いましらて、いてさせ給候はぬ事のうらめしさよと、いひ給ひければ、くものうへ人あたたへ、こん夜をかきりにまいるへし、御心やすくおほ(18)しめせ、身はまん／＼たるくかいにうかふとも、いのちあらんほとは、わすれへしとおほへす、君はめつらしきくものうへのふるまひにつき給ひ候はゝ、さありしとたにおほすまし、心にかゝりたまはず、こしやうとてまたのまれますと、

の給へは、ないし、かくの給ひ候へとも、なに事ともしらぬに、
くかいのうみと、の給ひ候へは、きもつふらわしきそやと、おほ
せありければ、いまゝてしらせたまわさりけるか、さらは申さん
とおもわせたまひける、よし／＼、のちにきゝ給ひ候へ、こん夜
は、さいこの物かたり申たく候へとも、三てうに返り、ひめ君
に、心しつかにいとまこわんとて、いてんとしたまひける」(18)
なにおか、このほのかかたみにまいらせん、これこそ、みをはな
さすもちたる物なればとて、つけのくしを、うすやうにつゝみ、
ないしにたてまつるとて、かくなん

(18)
いまはとて、さらてわかるゝ、君かとも、つけのおくしに、つ
けよおり／＼

かやうになかめ給へは、ないしこれをとりて、かくなむ

わかれなは、つけのをくしも、なにならん、あらはそのちの、
ことつてもせん

むかしのちきりは、さもさふらはす、いかならむところ多もくし
たまへと、の給ひて、なき給ふ、さるほとに、人のごゑしけれ
は、ひやうへのすけ殿、これほと身の身になりたる物の、我か身の
事はとてもあれ、はしめて人「に」しらせしとおもふなり、いま
はいとま(19)申てとて、たち給へは、そてをひかへて、ともか

くもいゝあへす、ひやうへのすけ殿、さてあるへきにあらねは、
なく／＼出給ふ、ころはしも月十五日の夜の事なれば、ゆきふり
つみて、みなしろたへにみへたり、さへゆく月かけくまなきに、
ないしは、なく／＼見おくりて、なをしすかたの、あくまでなま
めきたるを、これそさいこのなこりなりとおもふにも、めもく
れ、心もきへはてゝ、こゑもおしすなきいたり

これを見すてゝ、ちんのせきみちよりあゆみ出て、くるまにのり
三てうへまし／＼て、にしのつまとをたゝき、女はうたちをよひ
いたし、宮はいらせ給ひて候か(19)と、とひ給へは、たゝいま
いらせ給候つると、申ければ、さらは申せ、おもわさるに、せん
しをかうふり、あしたみやこをまかり出、さつまかた、きかぬか
しまへなかされまいらせ候なり、心しつかに御いとまこひ申候は
んとて、まいりて候なりと、の給へは、女はうたち、何ゆへそや
とて、なく／＼御まへにまいり、申ければ、宮さわかせ給ひて、
さき／＼は、よひあか月に、出いらせたまひ候をも、ひやうへの
すけには、ふかくはちさせ給ひしかとも、おりにしたかふ事にや
ひしろくかきたてゝ、きちやう、ひき物ひきわたし、これへとお
ほせありければ、ひやうへのすけ、なをしの袖かほ(20)にあて
ゝ、なく／＼まいり給ふ、ひめ君は、きゝもあへさせたまはず、

なきしつみ給ひける、宮おほせありける、いかにとよ、おもひも
よらぬ事をきく物かな、夢かや、うつゝかと、さらにいゝかた
し、なに事そとありければ、ひやうへのすけ、なく／＼申されけ
るは、身¹⁶□□こせる事わ候はねとも、何事のとかともおほ急す、
しゐのせうしやう、やみうちにせられつれとも、大しん殿、くさ
のかけにて御らんせん事も、あわれに、又、せうとのなんとなの
もおしくて、それにはいろわてこそ候へ、もしさやうの事にや
と、の給へは、みや、おもふに、はりまのさんみ、さんけんにて
そあるらん、かなわさらん²⁰もまでも、まいりて申へけれと
も、それにしり給ふごとく、はゝことのせうとなれば、うへには
うちとけ給へとも、したには心よからず、はりまのさんみ、御め
のととあるうへは、申ともかなうまし、ちからなし、いかにゆい
かひなくおほすらん、たゝし、なかされ人とても、めしか□□と
いふ事のあるそかし、心つよく思ひ給へど、おほせありしかは、
ひやうへのすけ申けるは、大かた、ちゝはゝにわかれしより、や
かてしゆつけをもつかまつり、ふかきやましにもとちこもり、ひ
とへに、こしやうほたひをとふらはんと、おもひしを、たゝひめ
君の事のみ心くるしくて、とにもかくにも、よろつのほ²¹きた
しとなり給ひて、いまは、よしなきてんしやうに、みやつかい

かまつり、はてに、かゝるうきめを見、しんせきたへたるしまの
すもりとなりし我身の事は、とにもかくても候へ、たゝあのひめ
君の事のみ、ふゆうのかけきへて、うくいすのふるすに、ひとり
とゝまるおもひは、みちのさわりとこそおほへ候へ、おそれたる
御事にて候へとも、しかるへくてこそ、御めにもかゝりてわたら
せ給ひ候、ひめ又、たのむかたなき人にて候へは、かまへてふひ
んにおもひ給ひ候へ、それは、こしやうまでも、うれしく候はん
と、申されければ、宮、御なみたをなかさせ給ひて、しかるへき
にや、見そめしよりこの²²かた、おろかにおもひ候はねは、
あの君の事は、心やすくおほしめすへし、ざりとも、いのちあら
は、いかてか、さてははつへき、我よにあらむかきりは、心やす
くおほしめせ、たゝいまのわかれこそかなしけれと、の給へは、
すけ殿申給ふやう、あけ候はゝ、¹⁷けあしや□□のものとも、まいり
候はんする、ゆゝしくおほえはんへれば、御返り候へと、申給へ
は、まことに、わかれなんまでもとて、いとまこいをも申、さい
こをも見はやと、そんし候へとも、はゝ女ご御かたに、きこしめ
さんもおそれなり、もしのふる事あらは、いそぎ申給候へとて、
ゆめとこそおほゆれ、ひめ君も²³いたくなゝけき給ひそ、な
かされ人も、かならずめしかへすといふ事はんへるなり、いまよ

り、おの／＼御いのりしたまへ、女はうたち、ひめ君をなくさま
まいらせよ、くれなはとくまいるへしとて、なく／＼御返りあり
ければ、ひやうへのすけ、われ七さあより、てんしやう多まいり、
しやうねん廿三にまかりなり、大かたてんに候へとも、ないは⁽¹⁸⁾
みやの御なさけにひかれまいらせてこそ、御みやつかるも申て候、
これそさいこの御みやつかあなれはとて、ちうもんまでこそ、ま
いられけり

宮、御くるまにめして、にしのかたを御らんしければ、ありあけ
の月、山のはにちか⁽²²⁾くなりゆけは、かくそきこゑし

かけはなれ、山のはちかく、入ぬれは、めぐりてあわん、あり⁽¹⁷⁾

ありあけの月

ひやうへのすけ、これをうけ給候て、かくなん

月かけは、いまこそかきり、山のはに、入なはいつか、めぐり

あふへし

宮す所まで、御とも申へけれども、みやう日、むかへのものきた
り候はんほとに、まかりとままり候はんとして、たのむかたなき人
をあわれみ給へと、申さるゝこそあわれなれ、ひめ君の事は、心
やすくおほしめせ、われいのちあらんかきりは、いかてか、おろ
かにすへきと、たゝおさなきときより、そいなしみしに、いまか

やうになり行あとにて、いかばかりこいしからんと⁽²³⁾おもふ
はかりそくるしき、さらは、まかりとままれとて、なく／＼出さ
せ給へは、すけ殿、御車のおとするまで、ちうもん⁽¹⁹⁾にたち、御く
るまのおとも、かすかになりければ、うちにたち返り、ひめ君の
いらせ給ひて、さき／＼は物こしにならては、御たいめんもな
りし「かと」も、ときにしたかへは、これそさいこなれと、おほ
しめし、きちやう、ひき物たかくあげ、ひめ君の御かたを、つく
／＼と見給へは、月くまなきに、あかみ給ひ候へは、なてしこの
露おもけにをわします、もみちつくしのかさねに、はしのもみち
のこうちきの、袖はむらこになきぬらし、ひすひのかんさし、う⁽²³⁾
ちなひき、なけきこかるゝすかたこそ、いとゝなみたもと
ゝまらねは、ひやうゑのすけ殿、なく／＼申給ふやうは、たゝし⁽²⁰⁾
宮の御事は、おろかならずみへさせ給候へとも、たかきも、いや
しきも、おのこの心わたのみなし、もしも、いかなる御心かわ
りもあるならば、やかてさまかへ、いかなるかた山さにともひき
こもり、ちゝはゝの御ほたひをもとふらひ、又は御身をもたすか
らせ給候へと、の給ふ、女はうたち、われなければとて、おろか
にあたり給ふな、よく／＼御みやつかへ申へし、我をさへ、かや
うになすさんみなり、まして、このひめ君をは、さたためて、やか

てうしない申さんすらん、心ちらさて〔24ま〕かたわらにさぶらへし、なに事をもおもふましき身のたくひ、ひめ君ゆへ、ちまに心をくたくとて、なき給ふところに、御むかへのけいしまいらりせんみやうとかや、よみあくる、まつ、ひやうへのすけ、一かたならぬ、つみふかき物なり、そのゆへは、とかなきせうしやうを、うしなはんとする、てん上にてのやみうちをし、さしもの御せつのせちへをやふる事、かた／＼もつて、あさからず、さては、さつまかた、きかひかしま多なかすなりと、よみあくる、さらにあたなき事ともなり、されとも、りんけんかへる事なければ、ちからおよはず、色なるころもまいらせて、車のうちへ入〔24ウ〕すたれさかさまにかけたり、御なをしのきぬ色なるころもおめすとて、かくなん

(22) かた／＼、ぬきすてし物を、ふちころも、又たちぎぬる、事そかなしき

なく／＼うちなかめて、かぶりさかさまにめす、けいし、おそしとせめければ、すてにいてんとし給ふに、いま一たひとやおほしめしけん、ひめ君の御かたへたちわたり、いとま申て、まかりいて候、御らんせよ、しやうをかへすして、かわりぬるありさまを、ひとへになき物と、おほしめして、かまへて／＼、こしやう

をたすけ給へ、かのし〔ま〕へつかんまで、いのちなからへしともおほえねは、かやうに申なり、まかりいて候そとて、御そてをかほに〔25オ〕「お」しあてゝ、なく／＼出させ給へは、ひめ君、(23) これを□□んして、おほなげなるときこそ、はちも人めもしのはるれ、きちやう、ひき物よりもれいてゝ、くるまにのらんとしたまふ、ひやうへのすけのたもとにとりつき、われをはたれにあつて、いつくゑおおするそ、ちまもなし、はまもなし、君よりほかわ、又たのむかたなき身を、いかにせんそやとて、なきこかれ給へは、御むかへの物とも、さすかいわきをむすはねは、みな／＼、そてほそしほりけり、すけ殿、これを御らんして、いかに、みくるしく、女はうたち、いれまいらせよ、我を申さは、なか／＼なりとて、御くるまにのせ給て、いてさせ〔25ウ〕給ひて、ひめ君のなき給ふ御こゑ、もんのほかまてきこゆれば、くるまをもやりすゝめたまはず、たつの時とは申せとも、たかひに、わかれをかなしませ給ふほとに、ひつしのときに、みやこをいて、そのひのとり時はかりに、やまさき、せきとのいんゑそつき給ふそれより、ふねにのらせたまへと、申ければ、夜もすから、かた／＼の文をそ、あそはしける、ひやうふきやうのみや、ひめ君の御かた、しやうのないし、なかつかさの中しやうの文とも、あ

そはして、すいしんに、つきみねと□□□をめて、我が身は、とく／＼きやうへまいりて、「こ」の文ともまいらせて、御返事とりてまいれとて」(26オ)「つ」きみねをは、きやうへかへして、あか月は、ふねにのら□□□ひて、まん／＼たるかいしやうにそ、うかみ給ひける

又、宮そのくれに、三てうへいらせ給ひて、御らんすれば、こゝかしこに、なくこゑのみして、いつしか物さひしけなるか、ひめ君は、あるかなきかのていにて、なきしつみて、ふさせ給ひけるか、宮を御らんして、あらあさまし、こはいかに、いまはおの／＼いのりして、いま一たひ、かわらぬすかたを、あんおんにて見せ給へと、いのちせたまわすして、いまわしく、なき人などいしたるやうにおわするぞ、女はうたちも、御まゑちかく候て、なくさめま「い」らせよ、このゑにては、あしかりつへしと」(26ウ)おほゆれば、いつかたゑも、くそくしまいらせんと思ふなり、さりととも、いま一たひ、ひやうへのすけ、みやこゑめしかへされてあるへきか、なんとおほせありて、なくさめ申させ給ふ所へ、つきみね、御ふみとてまいらせければ、むねうちさわきて、御らんするに、山さきせきとのいんよりと、かゝれたるに、たゞなくよりほかのことぞなし、ふんしやうを申せば、中／＼おるか

なり、御返事いそきかき給ふ

又、しゝうのないしに、ひやうゑのすけ殿よりの文にて候とて、まいらせければ、とりて□□□は、うわかきには、やまさきせきとのいんよりと、□ゝれたり、いまはいづくゑ行給ふらんとおもふに、心も」(27オ)□へ、なみたのひまより見給へは、すてにまん／＼たる□□のうゑに、物うきすまひとなりぬ、君は又くもの上にふるまひつき給ひなは、かすならぬ身にて候へとも、御心にはかけさせ給ふましと、おもふながら、こしやうをはたのみたてまつるとて、かくなん

君おもふ、なみたのふちに、しつみなは、こん世のあまと、なりてかへらん

かやうにかき給ふ、御ふみをかほにあてゝ、こはいかに、うらめしやと、くもの上にとかきたるはつかしきよ、さらは、心やす「く」かた見にまいらせんとて、たけにあまれるくるかみをきらんとし給へは、ちうしやうのみやうふのつほね、かくては、のちのちきりをは、いかゝし給ふへき、まつ御返事をあそ」(27ウ)はせと□すゝりなととりいたし、はや／＼とおほせありければ、よしやとて、なく／＼ふてをとり、くもの上のふるまひと、おほせ給ひたるこそ、はつかしけれ、よし／＼、のちはおほしめしあわせよ、

世にあらはこそとて、かくなん

もろともに、そのみくつと、なるやとて、なみたのふちに、
われもしつみぬ

かやうにかきて、うちふし給へ□、みやうふのつほね、これを給
候、御つかひにたひける

つきみね、これをたまわつて、かた／＼への御返事とりそへて、
いそぎくたりけるか、⁽²⁶⁾はり□の□かしのうらにて、まいりあひ
ぬ、ひやうへのすけ殿、⁽²⁷⁾きてのかたみと、これを見給ふ、ふね
の中、なみの上⁽²⁸⁾□すまゐ、心ほそくあわれなる

あけぬくれぬと□□ほとに、いなのみなとにつき給ふ、すさぎの
かたを御らんすれば、しろき鳥の、はしのあかきか、とひゆきけ
れば、いつくしきとりかな、あれをは、なにといふとりやらん
と、の給へは、かんとり申、あれはみやこ鳥なりと申ければ、あ
なおもしろのとりや、これや、なりひらの、いかなる事かありつ
らむ、みちのくへなかさされるに、みちすからなめ給ひける、
すみた川をとおるとて、わたしもりにとひて、いさこととはん
と、なかめけるも、むつましきみやことりとかやとおほしめし
て、かくなん⁽²⁸⁾

みやこ鳥、こいしきかたの、なになれば、わかふるさとに、こ

とつてもせん

かやうになかめ、なみたとともにゆくほとに、ひかすつもるまゝ
に、さつまかたへつきたまいぬ

この人のありさまを、くにかみたちまいり、いたわしくおも
ひ、きかひかしまゑわ、なかしまいらせすして、あたりちかきい
そへに、御所をつくりつゝ、てうはうさるへきやうに、しつらひ
て、すませまいらせける、まことに、おきふく風、いそへによせ
くるなみのおと、かもめ、あちむら、とひまとひ、すさぎにちと
りとひわたり、物ことに、あわ□□もよをすにつけても、もゝし
きや、大みや人□事のみおもひいてゝ、あわれ心あらむ人に、か
ゝる⁽²⁹⁾すまひを見せてとそ、おもひ給ひける

さるほとに、ひめ君思ひしつみけるを、宮とかくなくさめ給ひけ
る、したひ／＼に、月日をおくらせ給ひけるほとに、はりまの
さんみ、おもひのまゝに、又むすめのそつをちかつけて、ひとへ
に、ひめ君をうしない給ふへきやうを、いそぎけり、おやこうち
つれて、にしのだひにゆきてみれば、おもひしつみたるけしきな
りけるか、かれらを御らんして、あなあさましや、何事におわす
らんと、むねうちさわきて、やわらをき□□、もへぎの五かさね
に、おしのおり物の□□□□かけ給ゑる御すかた、ゆふはかりな

し〔29ッ〕い□た□まてうつくしくいらせ給ふらんと、めとまるほと
とな□□てか、にくゝはおもふへき、宮、この人におもひつき給
ひなは、かなはしと思ひければ、すけ殿なかされ給ひつるを、わ
らわかとかのやうに、きこしめさん、はつかしきよ、さらゝ、
わらわかしらぬ事なり、御みやつかひのひまも候はぬまゝ、□く
いまゝてまいらす候に、又、みやなんとのいらせ給ふに、こゝに
あまりに見くるしくおほしめさんもひんなし、しはらくいてさせ
給へ、このたいを、しつらいてまいらせ候はんと申せは、おりふ
し、ゑもんのすけ、みやきなんとも、さとへいてゝなし、めのと
こはかりなりけるか、申〔30ま〕けるは、宮に申さては、いかゝす
へき、しはらく申てとありければ、宮へも、あれから申へしと
て、くるまをやりよせ、なやましけにておわす人を、おやこし
て、ひきのせ給へは、めのともちからなくて、御ともにまいり
ぬ、おにかみのことくにて、四てうおりとのやのうちち、さしき
しつらゐて、おしこめてをきまいらせ、あなあさまし、こはいか
にわたらせ給ふへきと、心にせんかたなけれとも、人はあらは
や、みやの御かたへもまいらすへし、かとにわ人をつけて、まほ
らせければ、い〔ツ〕□きかたなし
さてその夜、宮いらせ給ひて、□□□□あけ給へと、おほせけ

れとも、人もなけれ〔30ウ〕□こたへ申こゑもなし、ゑもん、みや
きと、せんしありけれとも、人おともせず、こわいかにとおほし
めし、かうしをあららかにひかせ給へは、あきにけり、たち入、
御らんしければ、たゝくらきはかりにして、人おともせず、など
やくらきそ、人としてめしけれとも、こたへまいらせず、あさまし
くおほしめして、ときわをめして、あやしき事あり、ひまいらせ
よと、おほせありければ、御こゑをきゝ申、はりまのさんみ、い
そきまいりて、申けるは、宮の御いてのとき、申せと候つる、ひ
るほどに、あさましき事こそ候つれ、ゑもんのすけ申つる、これ
ほどの御身にならせ給ひて〔31ま〕この事しかるへくもなし、われ
らをもはこくませ給ひ候へと、ねんころに申けれとも、ひめ君は
きゝもいれたまわす候つるを、やかて御くるまにのせまいらせ候
つるほどに、あさましさに、さて宮の御いて候はゝ、何と申まい
らせ候はんするそと、申て候へは、なに事もきゝたまわす、ゆき
かたしらす、いて給ひ候つる、あさましきよと、申ければ、なん
てうさるへき、はりまのさんみかしわきなり、あわれ、ひやうへ
のすけなかせれしとき、これをとりいたして、いかならんとこ
ろへも、くしいてんとおもひし物を、心おくれ、くちおしきよ、い
まかゝるうきめをみつる、いかなるあり〔31ウ〕さまにて、うしな

いつらん、いまたいけてやおきぬらん、ちゝに御心をくたきて、
さりと、わらわにみせんとて、おきつるかたみやあるらんと、
しそくしらくせさせて、こゝかしを御らんしける、御物くそく
をは、みな／＼ひんかしのたゐへとりて、しとねなんにとりたて
ゝおき、けさまですまたまいつるところなれば、なつかしくおほ
しめし、しとねひきなをして、うちふさせ給ひける、あわれ、は
りまのさんみをいかゝすへきと、おほせとも、いまの御かとの御
めのとにて、かたをならふる人もなし、申てもかなふまし、せん
せの物おもわすへき身にてこそあるらめ、きちやうをつく／＼と
見^{〔32オ〕}給へは、きちやうのひきめに、しろきうすやうのむすは
れたるを、御とりありて、御らんしければ、ひめ君の御てにて、
かくなん

うきになを、又うちそへて、かなしきは、たへてつれなき、い
のちなりけり

身はうつせかひ、よるかたもなくなりぬ、こしやうかならずと、
かゝれたり、宮これを御らんして、御かほにをしあてゝ、たへい
りなき給ふ、すみなれしなこりもをしければ、こよひはこゝにて
あかさはやと、おほしめしけれとも、はりまのさんみか、おこか
ましく、うちなん^{〔とに〕}てわらわんも、はつかしければ、さら

はかへらんと、おほしめして、ゆめの心ちして、御所へか^{〔32ウ〕}
ゑらせ給ひける、そのゝちは、夜はしとねにうちふし給ひて、そ
のゝちは、御おもかけ御身にはなれず、たゝあけくれは、しのひ
におつる御なみた、むかし、たうのけんそうくわうていの、やう
きひをうしないて、なけき給ふも、かくやとおほえたり、しやう
／＼きうのはるゝまに、ふるやのたまみつにもことならず、しか
も、たゝならずときゝつれば、めつらしく、うれしくこそあり
つるに、心うや、されは、やみの夜のにしきになしつるかなしざ
よ、こいしきおもひをとりそへて、なげかせ給ふそ、あわれなり
はかなく、そのとしもうちくれぬ、あくる春のころ、宮の御は
ゝ^{〔33オ〕}女こ、いかに、みやのなやましけなるニ、なくさめまい
らせよ、なに事か、はるのなくさめあそひには、おもしろき物と
ては、まりにすぎたる物はあらし、まりあそはせよとて、たいり
より、しかるへききやう、てん上人をしやうしよせ、宮の御う
ちにて、あそひのありけるに、人々申けるは、あわれ、よるつにお
もひあわするに、ひやうへのすけかな、はなのもとに、月のあそ
ひ、しひかくわけんにも、くらからすありし物、いかなるところ
におわすらん、あたら人をとて、^{〔29〕}おの／＼なみたをなかず、中つ
かさの中しやう、申されけるは、こそしゝうのなひしも□□□へ

はなひきたまわさりし、このひやうへ(33ウ)のすけにはあひそめて、たかひに、あさからすありつるか、いまたおもひにしつみ、御みやつかひにも、物すさましく、ひとへに、つほねになきふしでおわする、世にあわれなりと、の給へは、宮きこしめして、しゅうのなひしはよきときしに、一め見はやおもひしに、きては、ひやうへのすけ殿と、さやうにありつらん、かた／＼なつかしければ、ゆきてとふらわんと、おほしめし

あけのひの、御なをしあさやかにめして、大りへまいる給ひて、まつ、しゅうのつほねをのそぎ給へは、しゅうは、やなぎの七かさねに、さくらつくしのこうちきに、すわうからきぬ、かたわらにぬきをきて、きんのことこそ(34オ)いて、うちふしたりけるか、なみたに色かへりたる、こうちきのそては、ところ／＼、むらこになきぬらしたるを、ひきかつき、ふしたる、まくらにいらせたまひて、いかにや、おなしねをのみなき給ふそと、おほしめせ、われも、おとらぬおもひにて候そやと、おほせありければ、なひし、これそとおもひて、きぬをしのけて見給へは、ひやうふきやうこそおわします、かくれまいらすへきにならねは、をきさせ給ひ、からきぬひきかけて、なやましく、ひんなくと申、うちそはみたる、かみのかゝり、ひすゐをなかしたることくにて、

□⁽³¹⁾けめの上よりはしめて、けたかく(34ウ)なかめあひ□りて、いつくしく、おろかならず、むめのかほはせ、花をうつし、やなぎのゑたに、きかせのとかなる、はるの日見る心ちしておわするを、宮御らんして、けにもうつくしかりける、これをこそ、われも人も、よしと御らんすれとも、うしないてなげく、三てうのひめ君にはおとれり、これよりは、なをけたかく、いかほと御らんしても、あく心ちなく、まれにはなさくうとんげも、これやらんとおもひし物を、うしなひけるこそ、うらめしけれ、いまたこの世にあらは、われおやこいしとおほすらん、又、なき身にもあるならは、いかなるつみにか、しつみ給ふらん、人を見るにも、人そこい(35オ)しきと、おほしめし、なひしのかたを御らんしければ、やなぎかさねのあふきのあるを、なにとなくとりて御らむす御ゆきなり、なんてんもしつかに、宮のうちもしつかなるに、けいしやう五あまのまひのそて、かせにひるかへるたひに、たまのかさりにことならず、比は七月七日、七夕のたへぬちきりをうらやみて、ちやうせひてんにいて給ふ、御かと、やうきひと、ておとりくみて、てんにあらはひよくのとり、ちにすまはれんりのゑたとならむと、ちきり給ふところを、あふきのゑにかゝれたるを、

宮ひらきて御らんして、いかになひし」⁽³⁵⁾むかしもためしあれはこそ、ゑにもとゝむらめ、いまわ人事に、くるしき事におもふなりとて、かくなん

まほろしに、ことつけしけん、むかしより、いきてわかるゝ、
我そかなしき

いまよりは、かくてこそなくさみけれど、ゆかりのくさとおほしめせとて、出させ給ふを、人もこそあれ、はりまの三み、ままいらせて、やかて、うちへまいりて申ける

ひやうふきやうの宮こそ、なひしのもとへかよわせ給へ、ないし、みめかたちよければ、これを申うけて、しいのせうしやうにあわせんと、申けるを、ちうしやう、これをきゝ給ひて、みやうふのつほねに、くわしくかたりければ、これをなひしにかたり給ふ、なひし、あな」⁽³⁶⁾心うや、たれゆへに、あかぬわかれをばして、物おもふ身となりぬるそや、かくて候はゝ、おもひのほかに、せうしやうにをしこめられては、いかに思ひふともかなふまし、さらぬさきに、たいりをいてんとおもひて、うれしくもしらせて給ひ候や、いゝかひなき事ありなは、この世にてわするへきか、こん夜まかりいてん「とて」、めのとのかたへ文やり、このほと、かせの心ち大事なり、しはらくいてゝ、いたわらむとおもふ

なり、のり物いそぎ給候へと、おほせければ、いそぎくるまをまいらせける、ないしは、こゝかしこにとゝまりて、さすかに、十三より「六」七年つかへたてまつりし、御みやつかゐの」⁽³⁶⁾なこりもをしかりける、さてあるへきならねは、見くるしきほうくとも、とりひそめ、かうしおろし、みすまきなどして、すてにくるまにのり給ふ、ころは「三」月なかはの事なれば、花の色、なのめならずおもしろく、月のまゑにまかひ、物あわれなるかな、なく／＼いてける、ちうしやう、みやうふのつほね、かくなむ

われゆへに、なをたちかへれ、はるかすみ、うらみんとおもふ、くも井なりけり

なひし、とりあへすかくなん

春かすみ、たちかへりなは、くもひなる、月にはいつか、めくりあふへき

かやうにうちなかめて、なく／＼御くるまをやりいたし給ふ、みやうふのつほね、これやかきりなるへきとおもふに、なみ」⁽³⁷⁾たもとゝまらず、さるほとに、めのものもとへゆきて、くるまよりおりたまいて、夜るのころもにうちふし給ひて、たゝなくよりほかの事そなき

そのとしのはるのころ、人々くわんともなり、しやりやうしける

に、めのと、ないしのふしたまへるまくらによりて、「申」やう、ふんこのせうしやうこそ、よろこひして候へ、さつまのくにをたまはりて候、たゞならば、かほとまで、よろこぶへきにあらねとも、ゆくゑもしらす、なかされたまいし、ひやうへのすけ殿をわするところと、うけたまわつて、うれしくさふらいて候、申やうに、御みやつかいもすさまじくおほしめさは、おもふ中には、とら〔37ウ〕ふす野へ、くしらのよるしまと申とも、ゆきなんと申候へは、御たつねありて、いらせ給ひ候へと、申せは、なにもしかるへきやうにとて、御めのとばかりたのませ給ひて、「す」てに出させ給ふ、さすかに、御なこりこそをしかりける

かれといふ、これといふかたならぬ御物おもひ、なくなく、とはよりふねにのり、みちすから、めいしよ／＼□なかも給ひける、よとのわたりをさしすき□、山さきせきとのいんより、おとこやまをふしおかみ、きんや、かたのゝあまのつゝはしらもと、ゑくち、かんさきうちすきて、いつしかならわぬなみのうゑ、ふねの中のすまひ、心ほそく、たゞこいしき人のかたと〔38オ〕おもふばかりを、ちからにして、ゆき給ふ、あけぬくれぬと、すき行ほとに、さつまかたゑそつき給ふ

めのと、そのあたりにて、人にとひけるは、なかされ人、ひやう

へのすけ殿のおわしますところは、いつくのほとそと、たつねければ、ほとちかく候、これ「より」にしへ廿四ちやうと、申ければ、めのと、ないしに申けるは、ひやうへのすけ殿おわしますところは、ちかく候なり、御ふみをまいらせ給ひ候へと、申ければ、うれしくおほしめし、いそぎ文かき給ふ

身をすてゝ、みるめとりこそ、あたまみの、うらまでふねを、さしてぎにけり

おほろけならぬ事おや、なに事もうちをきぬと、かゝ〔38ウ〕れたり、めのとこのわらわを、かの所へつかわす、ひやうへのすけ殿に物申さんと、申こゑをきかせ給ひて、宮この人とおほしめし、いそぎたち出、御らんしければ、しゝうのめのとにてそありける、こはいかにと、夢かや、うつゝとかいゝかたし、いかに／＼とありければ、わかちゝ、このくにかみにてくたりて候か、ないし「も」、わかはゝとつれて、くたらせ給ひて候、文とて、まいらする、いそぎ見給へは、身をすてゝ、みるめかりにと、かゝれたり、すけ殿、とりあへず、かくなむ

あたまみの、うらにいかなる、ちぎりして、身をすてゝしも、みるめかりけん

とかく申せは、ことおゝし、とく／＼いらせ給ひ候へとかき

(39オ)て、かへさせ給へは、めのと返りて、ないしをあしるにのせまいらせて、我が身も御とも申て、又御所へ入まいらせ候、ゆきつきて御らんすれば、いそへにつくりかけたる、いゑのすまひ、さすがによしありて、すみなしたまふり、いそへのまつかせ、すこくふきしほりは「る」かにかもめなきわたり、物ことに、すこきところ「に」おわしますよと心へて、まつ、御こしゑんによせければ、ひやうへのすけ殿、いそき身つから、いたきおろし給ひけり、やつれはてたる御すかたをみるより、とく物をはのたまはず、みなうちふし給ふ、しはしありて、おきなをり、心をしつめて、色々の「39ウ」御物かたりあり

さても、みやこには何事と、とひ給へは、三てうのひめ君こそうせ給へ、宮はたゝ一すちの御おもひにて、くこなともとゞめさせ給ふと、うけ給候と、の給へは、ひやうへのすけ殿、又かきくらすち心して、はりまのさんみしわさなれば、いのちおやたちぬらん、又、いやしき物にとらせてもやあるらん、いまはこの世にあらん事かたし、さらはしゆつけを「も」して、一すちに、この人のあとをもとふらわはやと、おほしめせとも、又、御みやつかあをすてゝ、我をたのみておわしたる人をふりすてゝ、いかゞしゆつけなともすへきと、いましはらくほとをへて、とにも「40オ

かくにもならんと、おほしめす、ひころは、まいにち御きやうをよみ、みやこにおわしますひめ君、あんおんにと、いのりたまひけるか、いまよりの御きやうは、なむ一せうめうほうれんげきやう、ひめ君のこしやうたすけたまわれと、あさ夕いのらせ給ひけり

さるほどに、宮わひめ君の事のみ、なげきしませ給ひける「か」、「みや」このうちの神ほとけ、色々の御りうくわんをたたまひてありけるか、まことにうけたまわれは、はつせのくわんおんこそ、れるむあらたの事と、うけたまわれ、さらは、七日さるろう申て、しけんにかかせて、たつねはやと、おほしめして、けいしやうをめして、はつせゑそ「40ウ」御こもりありける、色々のくわんしよをかきたてゝ、こめさせ給ひける、その御しるしにや、七日と申あか月、御とし八十はかりなるらうそのの、はどのつゑにすからせ給ひて、なんちかたつぬる人は、みやこ四てうへんをたつね給へ、かならずあひたまはんと、しけんをかうふらせ給ひて、ゆめうちさめて、ありかたさよとて、あけもはてぬに、御くるまにのらせ給ひて、御下「かう」ありける

さてもひめ君は、四てうのほとりに、おしこめまいらせてのちは、ゑもんのすけ、みやぎなど、たつぬれとも、ゆくゑもしらす

なり給ひぬれば、たゞなくよりほかの事そなき、四³⁴てうのやとのあるし」(41オ)「し」□人に、はりまのもくたいありけるか、あるしに物いわんとて、うちへいりけるか、すぎさまに、さしきのかたをみやりて、物こしに、このひめ君を、あなうつくしとおもひて、うちのていを見へき事をはさしをきて、このさしきには、いかなる人のましますらん、さもうつくしきすかたかな、いかなる人「そ」と、たつねければ、よしなき人の、よをしのひておわすると、申ければ、あわれ、とかむる人のおわせすは、あの人を、われにあわせよかし、たれ／＼にもひそかにと、いゝければ、あらしおもふやう、はりまのさんみ、うしないてゑさせよと、の給へとも、見まいらすれば、い」(41ウ)たわしさに、さてをきつれとも、さらは、この人にあわせんとおもひて、りやうしやうしける、さて、わかむすめ、十三になりけるに、いうやう、夕ざりは、あなたへまいりて、御みやつかひ申、夜にいらは、しやうしのかきかねをはつして、この人をいれまいらせよと、よく／＼おしゑて、さしきへまいらせける、めのと、もとよりかしこきものにて、れぬらすまいりて、御みやつかひ「申」せは、あやしとおほえて、このおさあひ物に、むつまじくかたらひて、さま／＼のひきて物をし、さび／＼にはんへるに、うれしくまいりたり、

ひころはまいらざりしに、いまよりは、かまへて／＼、さい／＼ま」(42オ)いり候へ、われをはおやともおもひて、なに事にも、いわん事を人にかたるなよ、われも人にかたるまし、さるにて、さて／＼、なにのよふにきたりたるそと、といければ、ありのまゝにそ、かたりける、ひめ君は、きゝもあへず、あなくちおしやとて、なきふし、しつみ給ひて、めのと、あわれ、心うき物かな、ひやうへのすけ殿なされたまいしとき、つゆしもともきへ「させ」給ふへき身の、なましいに御いのちのおわして、かゝるうきめを御らんする、かなしさよ、ねかわくは、ふつしんさんほう、ひめ君の御いのちを、夜のまにとらせ給へよかし、かなわすは、このなんをのかし」(42ウ)給へ「よ」と、もたへこかれけるこそ、あわれなり、けふの日のくれすもあれかしと、ねんするこそ、せめての事とおほゆれ

されとも、ひもくれ、夜にもいれは、めのと、このおさあひ物は、あとにふさせ、ひめ君をは、なけしよりしもになしおろし、我□□ひめ君のおはしつる所にふし、夜ふくれは、ひをは、しやうしよりあなたへとほし、しやうしの「か」けかね、つよくかけ、きよみつかたにむかひ、なむきみやうちやうらい、せんしゆせんけんくわんせおん、わらわ十三より月まふてして、卅三／＼

わんの御きやうを、けふにいたるまで、おこたる事なし、ひめ」
(43オ) 君のこん夜の御なんをのそぎ、たすけ給へよ、それかなわすは、ときのまに、しう／＼のいのちを、めしとらせたまへよと、申けるこそあわれなれ

さるほどに、夜もやう／＼ふ付けければ、あしをとあららかにふみなし、しきふのたゆふこそ、きたりけれ、「こゝ」あけよ、おさあいものとして、このしやうし、あららかにひきけれとも、うちよりつよくかけたれば、「ひ」けとも／＼あかさりける、おさあひ物もねいりぬ、おそろしげなるこゑにて、あなおこかまし、こん夜こそ、かくしたゝめ給ふとも、あしたはとくまいりて、け⁽³⁶⁾□□□□りなん、よし／＼、こん夜はゆるしまいらせん」(43ウ)とて、「の」とかにかへりけるこそ、くわんおんの御りしやうと、おほへたれ、うれしなるとも、かきりなし、こんやこそたすかるとも、けに、あけなは、おしていりなんす、あわれ、よのまに、⁽³⁶⁾つゆしもともきへはやとそ、おもひける
さて、いかゞせんと、もたへこかれておもへ□□□□しきたかくて、四はうまていたなり、もれいつへきかたもなし、めいどのかきとそおほえけり、せめての「こと」にや、四てうおもてなるしとみを、たかくあけて、こうちのかたをみたまへは、ころは七月

中はのころなれば、月くまなく、夜ふけ、人しつまり、ことに物あわれなるに、かみのかたより、ふへのおとの、まことにおもしろ」(44オ)くきこゑければ、あれきこしめせ、はるかにふゑのねのとをくきこゑし、ひやうへへのすけ殿こそ、おもしろくふき給ひし物、いかなるところにかをわすらん、にんけんまことに、心うやとて、ふたり、こうちを御らんして、なき給ふこそあわれなれ、さるほどに、かみのかたより、御くるまのおとはるかにして、ふゑのちかくきこゑければ、さても、ひやうふきやうの宮「の」御ふゑのねに、にさせ給ひ候つる物かなと、心をしつめてきくければ、宮の御ふへときゝなして、むねうちさわき、申けるは、これや、みやの御ふゑにてわたらせ給ふと、おもひて、ゆめうつゝともわきまへす、宮、四てうのかた」(44ウ)を、御むさうにまかせて、御ゆきなる、ときわ、むまにて御とも申ける、見つけて、しう、あまりにうれしさに、しのふ事なくて、もちたるあぶきをうちたゞきて、ときわ／＼おわするか、はりまのさんみにおしこめられて、うきめを御らんししますずに、いらせ給へ、物申さんと、申ければ、なにともきゝわけす、宮の御くるまにうちそひて、おりさせ給へと、申「せば」、なに事ともきゝわけたまはねとも、ときわか申にしたかひて、御くるまよりおりさせ給ひけれ

は、こゝあけよ、はりまのさんみかもとよりそ、たれかある、いそぎとくあけよと、いゝければ〔45オ〕しさいはしらす、さんみのもとよりといへば、かとあけ、やかて御くるまをやりよせ、はやめせと申、ひめ君、あまりのうれしさに、とる物もとりあへず、いそぎにけいて、御くるまにとりめして、うきところをはにけ出給ふ、宮、御くるまにうつり給ひて、御ひさに、御かほをあわせ、あなうらめしや、などや、いかなるところにおわすとも、かせのたよりの事つてを〔モ〕、のたまわさりけるこそ、うらみなれ、ひめ君、かくなん

かくとたに、いわまほしきに、やま川の、いわまの水に、せかれけるかな

宮、あわれときこしめして、かくなん

せかれける、いわまの水を、しらすして、もらさぬとのみ、うらみつるかな〔45ウ〕

くるまのうちにして、わかれし時はしめより、いまあふまてのくるしさと、かたり給ひて、御めのとの女はうのさとへいらせ給ひて、御よろこひかきりなし

さて、八月御さんの月なれば、やう／＼の御いのり、かきりなし、そのしるしにや、御さんへいあんに、わか君いてき給ひぬ、

御はゞ女こきこしめして、いてや、いかならん、いやしきしつめなりとも、宮わりなくおほしめさは、ちからなし、いわんや、さ大しんのみやはらならば、わざとの事なり、しかも、宮いてきさせ給ひつるうれしさよ、いやしき所には、いかてかおきまいらすへき、これへ〔46オ〕入まいらせよと候て、御むかへの御車七りやう、御そにわ、くれなゐの十二、はきの七つかさねに、くれなひの御はかま、とりそへてまいらせ給へは、おくりの御くるま、やりつゝけ、かきりあるきさきたちなりとも、これにはいかてまさるへき、宮す所へいらせ給へは、女こ御らんして、あないつくし、よのすへとも、かゝる人のおわするかよと、おほしめし、御まこのわか宮、いたきまいらせ給ひて、宮のおさなくおわせしときより、はるかにまさりたまへるそや、これをはわか御こにしたてまつらんとて、いつきかしつきまいらせ給ひけり

あけぬくれぬとするほとに〔46ウ〕かみな月のはしめのころより、御かと、なやませ給ひける、その月のすへに、つひにうせさせ給ひぬ、いまた、まうけの君もまします、くきやうせむきありて、ひやうふきやうの宮、くらひにつかせ給ひぬ、四てうに、をしこめられて、うきめを御らんしつる、三てうのひめ君、ときさきぎにたゞせたまふ、わか宮、とうくうにたゞせ給ふ

御かとおほせにわ、まつ、さつまかたへなかさされ給ひし、ひやうへのすけ、いそぎめし返し給へとの、せんしなり、御つかみくたり、事のよしを申に、ひやうへのすけ殿、よろこひ給ふ事かきりなし、たゞめしかへさんさへ〔47オ〕うれしかるへきに、ひめ君、ゆへなくうせ給ふとて、夜ひるなけき給ひしに、きさきにならせ給ふ、宮くらひに、つかせ給ふ、わか宮出きさせ給ひけり、しゅうのないしうちつれ、みやこゑ返り給ふ、ひやうへのすけ殿心中、たとへて申さんかたそなき、さるほとに、ふつしん三ほうのかこおわしける、なみかせのなんを、夜ひるきらわす、いそぎ給ふほとに、はやつにそつき給ふ、御むかへの御車、数をしらす、まつ、せんそなれば、三てうへいらせ給ふ、そつの君、四いのせうしやう、あわてさわきて出給へは、すけ殿、いかにや、物さわかしく、いつくゑいらせ給ふぞ、しはらく〔47ウ〕おわせよ、うかりししまの事とも、かたりなんと、の給へは、世にめんほくなけてそいたりける

いまた、その夜もあけぬに、おほしめしつる事なれば、きさきの宮の御かたへ参り給ふ、なかされ人、ひやうへのすけ殿、まいり給ふとて、きさき、七かさねのひやうふ、八かさねのきちやう、九のゑのみす、十ゑのまんの中より、いてさせ給ひて、ひやうへ

のすけ殿のたもとにとりつき給ひ、わかれまいらせしときのかなしき、いまのうれしき、いつれかおとりまさるへきとて、うれしなきにそなき給ふ、ひやうへのすけ殿、これをきき、かくなむ〔48オ〕

ふゑ竹の、なきしうきねも、わすられず、うれしきふしを、みるにつけても

まつわれよりも、御かとのあまりにこいさせ給ふに、まいらせ給へとて、いそきうちへまいらせたまいぬ、御かと、せひりやうてんゑいてむかひ給ひ、いかにや、しめちかはらとちきりしは、このゆくすへをおもふにて、いまのよろこひ、申はかりなし、やかて、三ゐのそつのつほねと、四いのせうしやうをは、いかゝすへき、さつまかた、いわうかしまへと、の給ひける、それおもひもより候はず、ちゝおとくつゞくの、くさのかけにておほさん事も、おそれに候へは、たゞなをしなためさせ給へと、申されければ、さるにても、われに物を〔48ウ〕おもわせ、心をくたかせつる事、ゆへなくおほへ候へは、かふりなをし、大くわんをとゞめんも、ふかゝらすおもふなり、この物とも、みやこの中には、なき物となせとて、日の中に、みやこのうちをはらわれて、いたされぬ

さるほとに、きさきのみや、御ふたりわか宮いてき給ふ、その御

よるこひ、申にかぎりなし、大なこん、くわんはくになり給ふ、
 ないし、めのとはかりをたのみて、さつまかたへくたりしかと
 も、てんかのまん所とそ申ける、御かと、わか宮二人、ひめ君二
 人そ、いてきさせ給ふ、御ふたりみや、とうくうにつかせ給ふ、
 ひめ君を、ひとり伊勢さいくうに〔49ウ〕ならせ給ふ、いま一御
 かたは、かものいつぎにたゝせたまふ、かた／＼、めてたくさか
 へさせ給ひける、くわんはく殿、わか君三人、ひめ君三人おわし
 ます、御ちやくし、ちうしやう、しなんは、しいのせうしやうと
 そ申ける、ひめ君は、一の宮のくらしひにつき給ふ、十一にてきさ
 きにたゝせ給ふ、むめつほのきさきと申給ふ、三てうのひめ君の
 御めのとは、ないしのかみになり、ゑもんのすけは、ないしのす
 けになり、ちうしやうみやうふのつほねは、おもぎ上の御女はう
 にて、なざけある人とこそ申ける、なかつかさの大しやうにそな
 り給ふ、ゆくすへはる／＼と、さかへさせ給ひて、「め」てたき」
 (49ウ)ためしにそ、申つたへける

本のまゝうつし申なり

わか袖にまたき時雨のふりぬるわ

君か心に秋やきぬらむ〔50オ〕

(注) (1)よのきそくもおはせず (2)「つほねへ」ナシ (3)御まへのた

てじとみのきはに (4)しんくはんもんの菊とて (5)はりまの
 さんみのはら、そつのつほねかと (6)つかはさるゝ (7)おさ
 なき心に (8)かゝるゑんにあはんとての心なりと (9)君くろ
 ふたくに思ひかゝるけしき、ちかまさりする心ちして (10)て
 んじやうにしゆへあるべしとて、しゆへとなさせ給ふ、御門
 せんじあるやうは (11)かゝるにござれる御代こそとの給ひて、
 立ち出給ふ (12)しんやうのえのほとりに (13)しゝひでんのが
 くのまへにて、たがひに名残の袖をひきちがへ (14)月にあた
 りて見給へは (15)いまはとてさしてわかれる君が門 (16)我が
 身にすぐすあやまり侍らず (17)けんびし二ちやうの物ども
 (18)なひ／＼は此宮の御なざけにひかされまいらせて (19)ひめ
 君の御かたにいらせ給ふ (20)当じ宮の御けしきは (21)御なを
 しをぬがせ給ひて、色の衣もめすとて (22)かた／＼にぬきて
 しものを (23)これを御らんじて、おぼろけなるときこそ (24)
 つきみねと申をめして (25)すでにまん／＼たるなみのうへに
 たゞよひ (26)はりまのあかしの浦にて (27)いきてのかた見と
 (28)四でうあたりなる所のかたおりどに (29)されはこそ、じゞ
 うのないしは御門にだにもなびきまいらせざりしかども (30)
 なひしたそとおもひて (31)わけめのうへよりはしめて (32)人
 々つかさなり、所領給はる (33)その松風すごく、しほぢは
 るかになくかもめ、風のけしき、いかに身にしみ給ふらん
 (34)家のあるじのしたしき物、はりまの国のもくだいにてあり

けるか 35 げざむにいらなん 36 露しもともきえなばや、ざ
しきたかくて、四方たてたる 37 ひめ君ひぎのうへにかきの
せ、御かほゝあはせ 38 いまのよろこびに、さんみのちうじ
やうになし給ふ、八日の日二位の大納言になり給ふ、さても
はりまのさんみ、そつ、しゐのせうしやう、いかゞすべき
39 一の宮御くらゐにつかせ給ひしかば、十ぜんのきさきにつ
かせ給ふ